

vol.30

復讐と助太刀

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

事件や出来事を何処から見るか？身に迫る危機と捉えるか、対岸の火事と見るか、それが問題だ。当事者と野次馬の立場は全く異なる。レイプの被害者が赤の他人の場合は、冷淡に「自己責任」の一言で突き放す人も、被害者が自分の娘や妻だったら、犯人を殺してやりたいと思うはずである。不正や悪事を暴こうとしながら、組織の報復を受け、職を失ったり、孤立無援になったりした内部告発者や、無実の主張を退けられ、法の庇護も受けられず、他人の罪を背負わされた冤罪被害者、あるいは過大な基地負担と米軍と日本政府への服従を強いられている沖縄の人々を冷笑する者は、単に利口そうに現状肯定をするだけのヘタレと軽蔑されて然るべきだ。権力や法、組織や主従関係の理不尽を誰よりも味わい尽くした者には復讐の権利があるし、心ある者はその助太刀を買って出るところだろう。

現在の復讐のあり方は、訴訟を起こすか、メディアを舞台に告発するか、ネットで反論の論陣を張るといったことが考えられるし、助太刀もネットを通じての応援という形があり得る。もっとも、現在のSNSの書き込みを見ても、感情的で偏見に満ちたものばかり目立ち、説得力ある論理を通す人には試練となる。そもそも論理や法を共有するには相応の教養が必要で、ハードルが高い。デマゴーグたちは、論理を飛ばして印象操作や言いっぱなしの機会便乗的なメッセージだけで「いいね」とフォロワーを増やす。デマゴーグたちは人気獲得の方法を熟知しており、ネットウヨ側に軸足を置いたほうが有利ということも分かっている。対立軸を明確にし、一方的に仮想敵を揶揄すると、一時的にバズるので、やめられなくなる。

真正のリベラル派なら、基本、正論を言うし、自分の主張に対する反論もしっかり受け止め、議論に応じるし、論理的な破綻を嫌う。他方、極右は反知性主義と陰謀論を信奉しやすく、問答無用で、時にヘイトクライムに向かう。どちらかといえば、後者が優勢な世相が気持ち悪い。今の時代、義に生きるのはそんなに難しいことなのか？

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授